

乳児期の食器操作の発達過程

:学校教育における食育促進カリキュラムの基礎として¹⁾

教育心理学コース 青木 洋子

同 上 山本 尚樹

目 次

1 問題

A 食事技能の発達

B 社会文化的アプローチ

C 存在論的アプローチ

1 食器利用の発達

2 存在論的「穴」としての食器

3 存在論的視点導入の意義

2 分析 1:操作の出現状況

A 目的

B 方法

1 観察対象と観察期間および観察方法

2 分析方法

3 分析対象

C 結果と考察

1 食事のセッティング

2 操作の種類

3 食器に何かが入る・何かを入れる操作

4 3 時点で観察された操作

3 分析 2:質的分析

A 目的

B 方法

1 観察対象と観察期間および観察方法

2 分析方法

C 結果と考察

1 食器に偶然食物が入る(a)

2 テーブル面と食器内で食物をいじる(b)

3 食器に食物を入れる(c)

4 食器から出た食物を戻す(d)

5 食具を置く(e)

6 食器間で出し入れする(f)

7 食べた後の食物を戻す(i)

8 その他のカテゴリー

9 食器に食器が入る

D まとめ

4 総合討論

引用文献

1 問題

ヒトの食事には皿やコップなど食器から、箸、スプーン、フォークなど食具まで様々な道具が使用される。特に発達初期の食事では、これらの道具の操作技能獲得が課題となる。

A 食事技能の発達

食事道具の操作はどのように変化してくのか。幼児期までの食事に必要な技能は次のように発達するとされている(ゲゼル,1952)。

食事の自立(茶碗)

15ヶ月—指でつまんで茶碗を持つ。手首を動かしてあまり早く傾け過ぎるので中身が大部分こぼれてしまう。

つねに目ははなせない。

18ヶ月—茶碗を口にもっていき、じょうずに飲む。

からになった茶碗を母親にわたす。母親が受け取れる位置にいないと落とし
てしまう。

21 ヶ月—茶碗をじょうずに扱う。持ちあげ、飲み、
もとのところへ置く。

24 ヶ月—飲むとき、片手で小さいコップを持つ。

36 ヶ月—水さしからじょうずに水を注ぐ。

食事行動の自立(スプーン)

15 ヶ月—スプーンを握って皿につきたてる。

スプーンですくうことが少しできる。

スプーンを口にもっていくときには、口に入
れる前に中身をだしてしまう。

18 ヶ月—スプーンですくう。

口にスプーンを入れることはむずかし
い。

口の中でスプーンをかえす。相当にこ
ぼす。

24 ヶ月—まっすぐに持ったままで口のなかへス
プーンを入れる。

こぼすことはだいぶ少なくなる。

36 ヶ月—女兒は、手のひらを上に向けてスプ
ーンを持つ。

ほとんどこぼさない。

食事に対する一般的反応

15 ヶ月—皿をしっかりと持つ。

食事のとき、自分で手をだしたがる。

18 ヶ月—あいた皿を母親にわたす。

24 ヶ月—食べるには依然として手伝いがいる。

ぐずぐずして食べ、食物で遊ぶ。とくに
ひっかきまわす。食事をいやがる。

食事のときほとんど話をしない。

36 ヶ月—食事が終わるまで手伝いはほとんどい
らない。

食卓の用意をすることが好きである。

しゃべるか、食べるかのどちらかをする。

食事中にたびたび立ち上がる。

48 ヶ月—食卓の用意をよくする。

献立を選びたがる。

食べることと話すことをうまく調和する。

食事中立ち上がることはほとんどない。

自分で食事を盛りたがる。

60 ヶ月—食べ方が速くなる。

食事中社会的でよくしゃべる。

(ゲゼル, 同上 pp.394-396.)

これらの技能の獲得時期は調査によってずれがあるが(例えば跡見・宮崎(1974)によると、ゲゼルが15ヶ月頃という「スプーンを握って皿につきたてる」は、公立保育園児で13ヶ月、私立保育園児で12ヶ月、家庭児で10ヶ月頃に7割以上の子どもが達成しており、出現時期はわずかに早かった。),長期にわたる技能の発達過程を理解することができる。

ではより詳細な個別の道具の操作技能はどのように発達していくのだろうか。Connolly & Dalgleish (1989)のスプーン操作の研究では、月齢の増加に伴いスプーンを握る指の向きが下向きから上向きになり、指の本数も減少していき、親指、人差し指、中指の3本で支える成人の握り方(adult grip)へと変化すること、また肩、肘、手首の関節や首の回転、口が協調しスプーンの軌道も滑らかになることなどが明らかとなっている。

フォークと箸もスプーンと同様に、指の向きと本数から類型化されており、保育園での観察によると年齢が高いほど高度な持ち方が現われることが分かっている(伊与田,1996)。また年齢が上がるにつれ堅硬性の高いかき揚げをフォークでは「突き刺す」、箸では「はさむ」、お浸しなど堅硬性が低い場合には「かきこむ」といった、食物の性質に応じた使い方が出現するようになることが分かっている(伊与田,前掲)。

このように食べることに必要な道具操作の技能は、運動機能の発達として捉えることができる。

B 社会文化的アプローチ

食事に必要な技能の獲得を捉えるもう一つの観点として、子どもが社会・文化的活動に参入していくことを発達と捉える社会文化的アプローチがある。これはヴィゴツキーの理論を基盤とするもので、「個人の発達が社会的文化・歴史的な文脈から切り離すことのできないものであり、その文脈を通して理解されなければならない」ということを前提とし(朴,2011:p60)、「子どもは、はじめ文化の体現者である大人との共同行為(コミュニケーション)を通して環境の獲得を行うが(これを精神間機能という)、しだいにそうした大人との関係で機能していた精神活動が内面化していき、子ども自身の中で行われるようになる(これを精神内機能という)(田島,2003:pp.7-8)」。外山(2008)によると、ヴィゴツキーは子どもの認識の起源をより熟達した他者(大人)との社会的相互交渉にあるものとしており、社会文化的アプローチでは大人と子どもの相互交渉にその関心が向けられている。

食具の操作に関しては、保育園での縦断観察から当初は保育士が直接スプーンを支える介助を行っていたが、自我の芽生えにより拒否行動が現れる時期に差し掛かると、保育士はその働きかけを言葉がけに変化させていくとの報告がある(河原,2002)。大人は「自分で食べたい」という子どもの意志を尊重しながら子どもの道具操作技能の獲得を支援し、子どもを自立した食べ手へと導く側面が明らかとなっている。

また食事中に使用される道具は、子どもの行為の制御に利用されることもある。1,2歳児の食事中の発話分析から、母親は摂食を促す発言が多く食べることを何よりも優先することが分かっているが(外山・無藤,1990)、1歳から3歳を対象にした研究では、子どもが食べていない時には食器を身体から遠ざけ、咀嚼している時には身体の前にそれらを置くことで、母親は子どもの自由になる領域を制御している(外山,前掲)。つまり、初期の食事は母親

によって強く先導されることが示されている。

食事技能の発達研究は、食具の「正しい」操作が運動発達に伴い精緻化していく様相を明らかにしている。社会文化的アプローチからは、食事という文化的活動に参加する子どもを教え導く者として大人が存在が浮かび上がってくる。ここで一つの疑問が生じる。ある対象が道具として使用されるまでの過程、つまり技能の発達として研究対象にされる以前の子どもを対象への振る舞いはどのようなものだろうか。

C 存在論的アプローチ

生態心理学者のリードは、生まれて間もなく不完全に把握されていた環境の意味は発見し利用され、その過程は進化するもの(リード,2000)と考えた。例えば食器は最初から「食器」としての意味が把握されているのではなく、それは発見されていくものと仮定できる。この観点から乳幼児期の食器操作を検討した研究がある(青木,2011)。

1食器利用の発達 離乳食を開始して食器を使用し始めた乳児の食事を12ヶ月間観察し、食器操作を数え上げた。このうち食器に何かを入れる操作である〈食具を入れる〉、〈戻す〉、〈入れる〉、〈入る〉などの増減の割合が高かったことからこの種の操作のエピソードを抽出し分類したところ、食器に偶然食物が入る(a)、テーブルと食器内で食物をいじる(b)、食器に食物を入れる(c)、食器から出た食物を戻す(d)、食具を置く(e)、食器間で出し入れする(f)、食器内で入れ替える(g)、食べる食物を入れ、食べない食物を出す(h)、食べた後の食物を食器に戻す(i)、自分の食器に食物を入れる(j)の10種類のカテゴリーに分類された。観察当初は積極的に食器に何かを入れる様子は見られなかったが、(特に(a),(b)のエピソード)、主に(c)から(j)では「他の対象を収める」食器の特性が利用されていた。食器に何かを入れる動きはどれも似ているが、食器利用

の意味は異なっていた。

それから,(b)のように食器の中でもテーブルの上でも食物をいじっていた時期には食器の内外は区別されていないが,(c)から(j)のエピソードのようにテーブルの上に置くのではなく食器に入れる様子が観察されてからは両者の区別が明確になっていったものと考えられる。(h)で見られた,食器の中に入れることと食器の外に出すことの区別が顕著な例もあった。つまり,食器とテーブルは徐々に分化していくと推測される。

2存在論的「穴」としての食器 食器とテーブルはそれぞれ閉じた面を持つ非連続の異なる対象である。しかしそれらが徐々に分化していくとはどういうことか。この問題には食器の窪みを「他の対象を収める」特性,つまり「充填可能性(fillability)」を有する「穴」と考えることで存在論的考察が可能となる。

存在論的考察とは,「アリストテレスに従えば,それは「存在としての存在」について考察すること(加地,2008a:p3)」、そしてそれを「できるだけ一般的な観点から考察すること(加地,前掲 a:p3)」である。アリストテレスは「哲学における最も中心的分野としての『第一哲学』の地位を『存在の存在』について考察するという課題を果たす学としての存在論に与えた(加地,前掲 a:p4)」。またアリストテレスの「実体主義(Substance Ontology)」が想定した実体は素粒子,原子,分子などのマイクロな対象や天体,銀河,宇宙などのマクロな対象ではなく,植物,動物,人物,製造物,建造物,地理的対象などの「メソスコピック(Mesoscopic)」と呼ばれる中間サイズのもの指す(加地,2008b)。

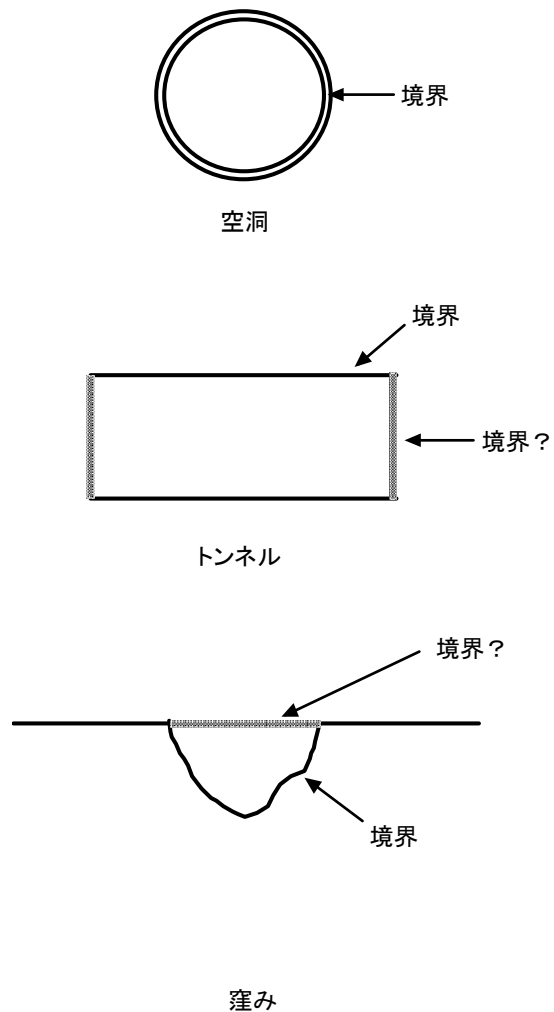


Figure 1 穴の境界図(加地(2008)を元に作成)

加地(前掲 a)は,穴はそれ自身が独立で存在することができずその存在には穴を有する物体(ホスト)が必要となるため純然たる実体ではないが,実体に近い性質を持つことから「実体的対象」と呼んでいる。食器をこの例に当てはめると,食器がホスト,食器の窪みが穴となる。ピンポン球のようなホスト

が閉じた形状の場合の穴の境界はホストの形状に準じるが、トンネルや地面などの窪みでは、穴の明確な境界を設定することはできない(Figure 1 参照)。

内臓や腕、脚など機能や形態によるおおよその区切りはあるが確定的境界がない実体は「非分離部分(undetached part)」と呼ばれ、その境界は私たちが任意に設定しているものに過ぎないと言われる(加地,前掲 a)。そこで穴を可変的境界を持つ非分離部分と仮定して食器利用を図示したものが Figure 2 である。

食器の中でも外でも食物をいじっていた時期は(ア)のように食器の穴は外部のテーブル面まで連続していた。そして食器に何かを入れるようになると、(イ)が示すように食器の穴はほぼ食器の形状と一致する。そして仕切りのある食器の中で入れ替

えを行うようになると、(ウ)のように食器の中の穴は細分化したと考えられる。このように食器とテーブルの分化は、穴の境界の変化として解釈することができた。

3存在論的視点導入の意義 ここまで食事道具に関する発達研究の 3 つの流れを概観してきたが、本論では 3 つ目の存在論的視点から食器操作の発達を検討する。その理由は次の通りである。

まず一つ目として、食器具操作技能の発達は特に食具に関してその詳細が既に明らかとなっている。だがその社会的・文化的に「正しい」方法で操作を行うまでの過程は十分に明らかとなっていない。Lockman(2000)は発達初期に現れる手の活動と後の道具使用との関連を指摘しており、両者は連続的に捉えられるべきだと主張している。

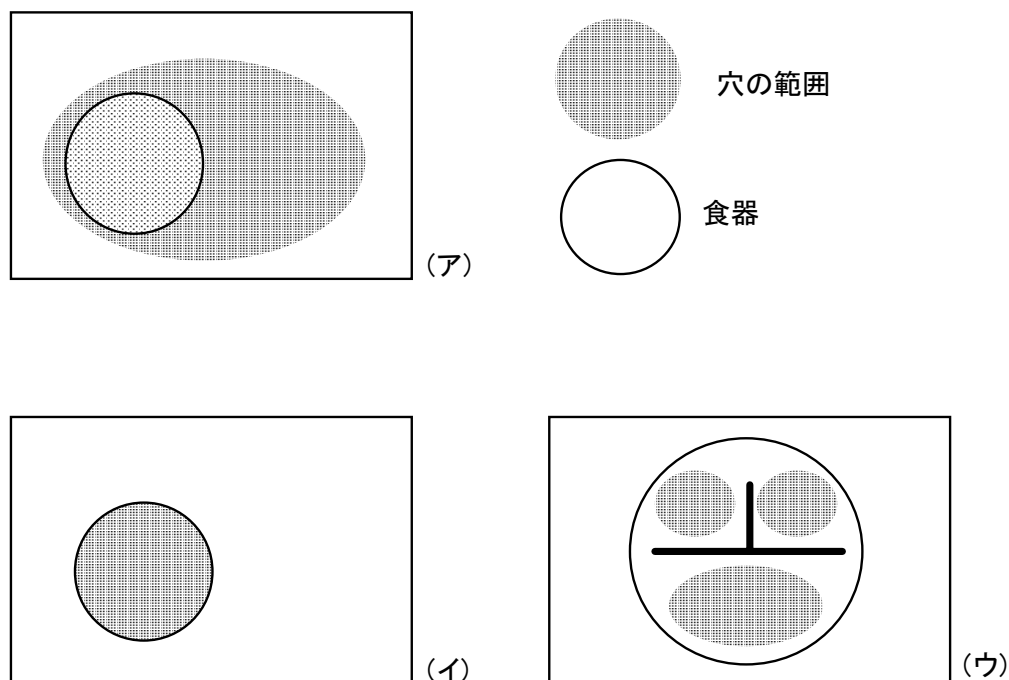


Figure 2 穴の境界模式図 (青木(2011)から転記)

二つ目として、社会文化的アプローチは大人と子どもの社会的相互作用に注目してきた。その分析対象は発話が中心であるため、子どもと物理的対象との相互作用について更なる検討が可能だと考えられるからである。ここで重要な点は、子どもと物理的対象の相互作用は社会的相互作用を重視する社会文化的アプローチと相反するものではないという点である。「子どもを取り囲むさまざまなモノは大人の意図のもとに選択、配置されており、その意味で文化的に構成されたもの（外山、前掲:p.233）」であり、大人が与えるモノにはそろそろ使えるようになって欲しいという期待が込められている(Valsiner,1987)。そしてそのような「他者が子どもに利用できるようにしたり、子どもに向けて強調しているすべてのアフォーダンスが含まれ、他者が子どもに禁じているアフォーダンスが排除され(リ

ード、前掲:p270)」、「乳児がその時点ではまだできないができるようになることを期待されたり、その発達のための足場づくりさえなされている行為も含まれている(リード、前掲:p270)」場をリード(前掲)は「促進行為場」と名付けた。つまり子どもを取り巻く物理的環境は既に周囲の大人の社会的・文化的な相互交渉を含んでおり、モノと子どもとの相互作用の検討は既存の社会文化的アプローチの知見を補うものと位置付けられる。

3 つ目として、存在論的アプローチの先行研究は乳児 1 名だったことから、対象児を増やして再検討する必要がある。そこで本論では先行研究の枠組みを用いて一般化できるカテゴリーの同定を行うことを目的とした。

Table 1 食事のセッティング

	11ヶ月	15ヶ月	20ヶ月
食事形式	手食	手食	手食・食具食(スプーン)
テーブル	個人用	大テーブル	大テーブル
保育士の介助	食器を一つずつテーブルに乗せる	適宜食器を遠ざける	食事途中で食具を与える
献立	おかゆ、お味噌汁	ごはん、さんま、小松菜お浸し、お味噌汁	ごはん、ほうれんそうのお浸し、蛤のお吸い物

2 分析 1: 操作の出現状況

A 目的

家庭での食事を縦断観察した先行研究(青木, 前掲。以下適宜「家庭での食事」と表記。)との比較の為, 食器操作の種類と出現時期を調べることを目的とした。

B 方法

1 観察対象と観察期間および観察方法 観察は都内保育所にて行った。主食の米は玄米で, 化学調味料を使用しない食事を提供していた。食器は茶碗, 汁碗, 1 センチ程の深さの平皿, 持ち手付き深皿, 湯呑みを用いられた。全て磁器製であった。子どもが食物を含めた様々な感触の物質に直接触れること奨励しており, 0 歳児の遊びとしてテーブルに小麦粉や寒天などを広げて自由に触らせるということも行っていた。食事は手食でも自分で食べることを尊重し, 食具は子どもが興味を示すようになると順次与えていった。

観察対象児は 0 歳クラスの男児 2 名(以下それぞれ O, R と表記。いずれも観察開始時 11 ヶ月齢。)だった。昼の食事が観察対象だった。撮影はビデオカメラを用いて次の手順で行った。園児がカメラに気を取られて食事に支障をきたさないよう, 保育士との協議により撮影は食事を開始して数分後に離れた場所にカメラを設置して行うこととした。0 歳児クラスでは準備ができた児から順番に食事を始めていたので, 他の児より先に食べ始めた場合には食事の冒頭数分が記録されない場合があった。観察期間は 2010 年 6 月から 2011 年 3 月まで, 月に 1 回の頻度で計 10 回撮影を行った。

2 分析方法 家庭での食事を縦断観察した先行研究と同様の分析を行った。まず食器への接触を操作として動詞でラベルを付した。さらに本研究の結果 3 時点全てで現われた操作の比較も行った。

3 分析対象 本研究で分析対象としたのは, 全 10 回の観察のうち 1 回目, 5 回目, 10 回目(それぞれの月齢は 11 ヶ月, 15 ヶ月, 20 ヶ月)の 3 回であった。6 回目は事情により 1 名の撮影が困難だったため, 中間回の分析には 5 回目を用いた。

C 結果と考察

1 食事のセッティング 食事の状況は Table 1 の通りだった。11 ヶ月時はテーブルが付属した幼児用椅子が使用され, O と R は隣同士で着席した。15 ヶ月と 20 ヶ月時は大テーブルで複数の園児と食事した。テーブルの上の食器が多くなると中身をこぼしやすくなるとの理由から, 食器は 11 ヶ月では基本的には保育士が一つずつテーブルに運ぶ形式で行われた。O は途中同時に 2 つの食器がテーブルに置かれることがあった。

11 ヶ月の時の食事では殆どの時間テーブルに置かれた食器が一つだったことから, 〈戻す〉と考えられる操作も〈入れる〉とした。〈戻す〉は複数の食器の中から入れる場所を選択していると考えられる場合にだけ分類した。

2 操作の種類 観察された操作は全部で 30 種類 (Table 2), 出現状況は Table 3 の通りであった。新たに〈手を入れる〉と〈傾ける〉が追加された。その定義はそれぞれ「開閉などの手の動きを伴わずに食器に手を入れる。」「食器を持って斜めにする。」とした。

11 ヶ月では O が〈入れる〉, 〈手を入れる〉, 〈取り出す〉, 〈飲む〉, 〈触れる〉, 〈叩く〉, 〈つつく〉, 〈中身をいじる〉, 〈握る〉, 〈持つ〉, 〈引き寄せる〉の 12 種類, R が〈手を入れる〉, 〈取り出す〉, 〈触れる〉, 〈叩く〉, 〈中身をいじる〉, 〈擦る〉, 〈握る〉, 〈口をつける〉, 〈引き寄せる〉, 〈押しやる〉, 〈倒す〉, 〈振る〉の 12 種類であった。

Table 2 観察された食器操作の種類と定義

行動	定義
入る	食器の上方で手を離れた食物が食器に入る
入れる	食物を食器に入れる
投げ入れる	食物を食器に投げて入れる
戻す	食物が元々盛りつけてあった食器に食物を入れる
食具を入れる	食具を食器に入れる
スープをかける	食器内の食物に、スプーンでスープをかける
※手を入れる	開閉などの手の動きを伴わずに食器に手を入れる
浸ける	食器内の液体に食物を浸す
取り出す	食器内の食物を手で取り出す
すくう	食器内の食物を食具ですくう
飲む	食器内の液体を飲む
触れる	手を食器に接触させる
押す	食器を手で押す
刺す	食具で食物を刺す
叩く	手を食器に繰り返し勢い良く接触させる
食物を叩く	手または食具を食物に繰り返し勢い良く接触させる
食物を押す	手または食具で食物を押す
食物に触れる	手または食具を食物に接触させる
食物をつつく	手または食具を食物に繰り返し接触させる
食物をずらす	食物を食器内で移動させる
中身をいじる	食器内の食物を手で握りつぶしたりこねたりして変形させる
擦る	手または食具で食器の表面を擦る
摘む	指で食器を摘む
握る	手全体を使用して食器を握る
固定する	食器を動かないように手で押さえる
添える	食具で食物をすくう時に空いている手で食器に触れる
顔を覆う	食器を顔に被せて覆い隠す
口を付ける	食器に口を接触させる
なめる	食器をなめる
噛む	食器を噛む
※傾ける	食器を持って斜めにする
持つ	食器をテーブル面もしくは床面から持ち上げる
置く	食器をテーブル面もしくは床面に置く
引き寄せる	食器を身体の方に引き寄せる
押しやる	食器を身体と反対方向に押しやる
払う	食器を左右方向に押しやる
はたく	食器を主に上下方向に勢い良く払う
落とす	食器をテーブル面の下に落下させる
テーブルを擦る	食器でテーブル面を擦る
渡す	食器を養育者に渡す
倒す	食器の上下方向をテーブル面もしくは床面上で90°回転させる

黒塗りは今回観察されなかった操作。※は今回のみ観察された操作。

Table 3 OとR別出現操作と出現時期

O操作出現表

	11ヶ月	15ヶ月	20ヶ月
入る	■	■	
入れる	■	■	■
戻す		■	
食具を入れる			■
手を入れる	■	■	■
浸ける			
取り出す	■	■	■
すくう			■
飲む	■	■	
触れる	■	■	
叩く			■
つつく	■		
食物をずらす			
中身をいじる	■	■	■
擦る			
握る	■	■	■
固定する			
口をつける			
持つ	■	■	■
置く			■
引き寄せる	■	■	■
押しやる		■	■
落とす			■
渡す		■	■
倒す			
ひっくり返す			
起こす			
傾ける			■
振る			■
回す			■
操作合計	12	14	19

R操作出現表

	11ヶ月	15ヶ月	20ヶ月
入る		■	
入れる		■	■
戻す		■	
食具を入れる			
手を入れる	■	■	■
浸ける			
取り出す	■	■	■
すくう			■
飲む		■	■
触れる	■	■	
叩く			■
つつく			
食物をずらす			■
中身をいじる	■	■	■
擦る			
握る		■	
固定する			
口をつける	■	■	■
持つ		■	■
置く			■
引き寄せる	■	■	■
押しやる		■	■
落とす			
渡す			
倒す	■		
ひっくり返す			
起こす			
傾ける			
振る	■		
回す		■	■
操作合計	12	15	13

黒塗りは操作が出現した時点を表す。

15ヶ月ではOが〈入る〉、〈入れる〉、〈戻す〉、〈手を入れる〉、〈取り出す〉、〈飲む〉、〈触れる〉、〈中身をいじる〉、〈握る〉、〈持つ〉、〈置く〉、〈押しやる〉、〈落とす〉、〈渡す〉の14種類、Rが〈入る〉、〈入れる〉、〈戻す〉、〈手を入れる〉、〈取り出す〉、〈飲む〉、〈触れる〉、〈中身をいじる〉、〈握る〉、〈固定する〉、〈持つ〉、〈置く〉、〈引き寄せる〉、〈押しやる〉、〈回す〉の15種類だった。20ヶ月ではOが〈入れる〉、〈食具を入れる〉、〈手を入れる〉、〈取り出す〉、〈すくう〉、〈叩く〉、〈中身をいじる〉、〈握る〉、〈固定する〉、〈口をつける〉、〈持つ〉、〈引き寄せる〉、〈押しやる〉、〈渡す〉、〈倒す〉、〈ひっくり返す〉、〈起こす〉、〈傾ける〉、〈回す〉の19種類、Rが〈入れる〉、〈戻す〉、〈浸ける〉、〈取り出す〉、〈すくう〉、〈飲む〉、〈叩く〉、〈食物をずらす〉、〈中身をいじる〉、〈口をつける〉、〈持つ〉、〈引き寄せる〉、〈回す〉の13種類だった。

3食器に何かが入る・何かを入れる操作 家庭での食事では、食器に何かが入ったり入れたりする操作の出現時期に次のような特徴があった。〈入る〉は初期にのみ観察され消失し、〈入れる〉、〈戻す〉、〈食具を入れる〉がそれより遅れて現われた。本研究の結果からは両児ともに〈入る〉が20ヶ月時に観察されなかったこと、Oは3時点で〈入れる〉が、15ヶ月時に〈戻す〉が、20ヶ月時に〈食具を入れる〉が出現したこと、Rは15ヶ月と20ヶ月時点で〈入れる〉と〈戻す〉が混在していたことが家庭の食事と共通していた。

また家庭での観察結果では〈入れる〉が13ヶ月以降長期間にわたり分布していたが、本研究でもOは3時点で、Rは15ヶ月と20ヶ月の2時点で同操作が出現しており、類似性が見られた。しかしRでは〈食具を入れる〉が一度も観察されなかった。この点は以降のエピソード分析にて検討することとした。

4 3時点で観察された操作 3時点で観察された操作について家庭での食事との比較を行った。Oの場合〈入れる〉、〈手を入れる〉、〈取り出す〉、〈中身をいじる〉、〈握る〉、〈持つ〉が、Rでは〈取り出す〉、〈中身をいじる〉、〈引き寄せる〉が3時点で観察された。

両児に共通する〈手を入れる〉は家庭では観察されなかった。〈傾ける〉も家庭では観察されなかったが、映像を確認すると〈固定する〉や〈回す〉に動きが類似しており、分類上の問題とも考えられた。

また〈中身をいじる〉は家庭での食事では9ヶ月と16、17ヶ月に集中していたが、それ以外の月齢では殆ど見られなかった。これは、様々な対象に触れさせるという観察対象の保育所の取り組みが反映しているものと考えられる。もう一つの可能性として、子どもと養育者が一対一で介助をする家庭と複数の子どもを同時に介助する保育園の違いが挙げられる。しかしどうして食器に入れた手を動かさない〈手を入れる〉が保育園のみで観察されたのかその明確な理由は分からなかった。いずれにしてもここでの比較では、中の食物をいじるか、いじらないかに関係なく、後者の方がより食器の中に手を入れることが多かった。

出現操作の変化の詳細を明らかにするには3時点だけでは不十分だった。今後残りの食事についても同様の分析が必要である。

3 分析 2: 質的分析

A 目的

家庭での食事で観察された食器に何かが入る・何かを入れることに関連するエピソードとの比較および本研究で特徴的な食器操作について分析1では捉えきれない食器利用方法の検討を目的として質的分析を行った。

B 方法

1 観察対象と観察期間および観察方法 分析 1 と同様であった。

2 分析方法 観察データの中から食器に何かが入る・何かを入れることに関連するエピソードを抽出し、家庭での食事で観察されたカテゴリーに当てはめ共通するものを特定した。また、本研究で特徴的なカテゴリーも抽出し検討した。

C 結果と考察

本研究で抽出したエピソードを、家庭での食事で得られた 10 のカテゴリーに分類した。本研究のエピソードはこのうち 7 つに当てはまった (Table 4)。

エピソードの最初に付けられた事例番号は、O は 1, 2, 3・・・, R は①, ②, ③・・・と通し番号を表記した。またそれぞれ O と R の別と月齢を [] 内に示した。カテゴリー名の後に付けられた (a) などの表記は、比較を容易にするため家庭での食事のカテゴリー分けに用いられたアルファベットをそのまま使用した。

1 食器に偶然食物が入る (a)

【事例 1】[O/11] 食器からかぼちゃを取り出し両手でちぎる。ねっとりしたかぼちゃが付着した右手を開閉し、続けて振る。左手を結んだまま右手に接触させると人差し指が少し持ち上がりかぼちゃが落下する。食器の中に入る。

【事例 6】[O/11] 食器の中の粥を握って口に運ぼうとするが少し顔から遠ざけ手を見つめる。手から食物がこぼれ食器に入る。食器に手を伸ばすと握っていた手を開いて粥を食器に入れる。そして再び粥を握って食べる。

【事例 11】[O/15] 深皿からお浸しを取り出すと食器に落ちる。またお浸しを取り出すと手を細かく振る。半分くらいの量が食器に落ちる。手に残ったお

浸しを食べ、食器に戻す。

【事例 13】[O/15] O の前には平皿だけが置かれている。食器に手を入れてじゃがいもをいじっている。それを掴んで持ち上げると手から滑り落ちて食器に入る。その後手を食器から出してテーブルを叩き始める。

【事例①】[R/15] さんまを頭に乗っている。隣の O が食器を落とすとさんまを手を持って O の方に顔を向ける。さんまがほぐれて食器に入る。

O の 11 ヶ月では食物をいじっている間に食器に落下していたが、15 ヶ月では口に運ぶ前に食物の量を調整しているようだった点が異なっていた。しかし後者も食器に向けて手を伸ばすのではなく、食物を握った手を食器からやや離れた位置で振っており、食器に向けた操作ではなかった。

2 テーブル面と食器内で食物をいじる (b)

【事例 4】[O/11] 両手でだいこんをいじった後左手で持ったまま食べる。右腕を食器の縁に置いている。そのまま右手を食器の中に入れる。口をもぐもぐ動かしながら左手で自分のテーブルの縁を握り、次に食器の縁を握って持ち上げる。右手で食器の中身をいじりながら左手で食事を終えた R のテーブルの食物をいじり、肘掛けを引っ張って自分の方へ引き寄せる。保育士が R の椅子を遠ざける。

【事例 8】[O/11] 保育士が食器の縁を握って少し持ち上げている。O は食器の中身をいじる。保育士が大根を手で O に食べさせている間 O の手の動きが止まる。

Table 4 食器操作カテゴリーの共通性

カテゴリー名／対象児名	家庭		保育園	
	K	O	R	
食器に偶然食物が入る(a)	○	○	○	
テーブル面と食器内で食物をいじる(b)	○	○	×	
食器に食物を入れる(c)	○	○	○	
食器から出た食物を戻す(d)	○	○	○	
食具を置く(e)	○	○	×	
食器間での出し入れする(f)	○	○	○	
プレート間での出し入れする(g)	○	×	×	
食べるものを入れ、食べないものを出す(h)	○	×	×	
食べた後の食物を戻す(i)	○	×	○	
自分の食器に食物を入れる(j)	○	×	×	

黒塗りは今回観察されなかったカテゴリー。

食器内で食物をいじる場面は 2 名とも非常に多く確認されたが、テーブルの上にこぼれた食物をいじることは非常に少なかった。O については 11 ヶ月時には食器の中も外も食物をいじる場所として利用しており、この意味で食器とテーブルは未分化な状態と言えるだろう。

3 食器に食物を入れる(c)

【事例 3】[O/11]かぼちやを握っていた右手を食器に入れ開いてかぼちやを食器に入れる。

【事例 5】[O/11]右手で食物を食べながら、左手で

食器内のにんじんを取り出しすぐにまた食器に入れる。

【事例 9】[O/15]ご飯を手で握って口に運ぶ。まだご飯が残っている手を平皿に入れ開閉するとご飯が皿に入る。

【事例②】[R/15]さんまを両手で握って食べている。右手でちぎった分を平皿の空いているところに入れる。

【事例⑥】[R/20]平皿から右手でお浸しを掴み、左手で少量取った後、食器に入れる。右手に残った分

を両手で持ち口に運ぶ。

【事例⑧】[R/20]右手首に絡まったお浸しを深皿に入れようとするが失敗する。手首を口に持っていない何度か噛むがお浸しは取れない。テーブルに振るい落とし手で摘んで食べる。

ここでも(a)の事例と同様に、一口分の量の調整をし残りの食物を食器に入れる様子が観察された。(【事例⑥】)。また【事例⑧】では、手に付着した食物をすぐに振り落とさず、まず食器に入れようとする様子が伺える。その試みが失敗するとテーブルの上に食物を落とし摘んで食べたことから、食物を収める場所としてテーブルよりも食器内を選択する傾向が強くなっているものと考えられる。

4食器から出た食物を戻す(d)

【事例 10】[O/15]ご飯の入った茶碗に手を入れ握って少し持ち上げるが食器に戻す。再びご飯を握って口に運ぶ。

【事例③】[R/15]平皿から食物を取り、隣の男児に差し出す。男児は手が届かない。しばらくするとRは食器に食物を戻す。

【事例⑤】[R/15]湯呑みの縁にかかったお浸しを平皿に戻す。

OよりもRの方が戻す操作が多く見られた。Oは食器に戻さずに手の中に食物を握ったまま何口も食べるがあった。

5食具を置く(e)

【事例 15】[O/20]右手にスプーンを持ったまま平

皿に入れる。茶碗の縁を左手で握って持ち上げ逆さにする。保育士が取り上げ平皿をOに近づける。スプーンで食物をすくい始める。

【事例 16】[O/20]スプーンの柄を下にして平皿に突き立てる。30秒程そのままにして食器から引き抜くと、口元に持っていく食べるような動きをする。

【事例 17】[O/20]スプーンを持った右手を平皿に入れる。左手は深皿の縁を握っている。保育士が床に落ちたものを拾う様子を見ている。その後汁物が入った深皿の持ち手を両手で掴んで飲む。右手はスプーンを握ったままである。

家庭での食事では食具から手を離して食器に入れていたが、ここでは食具を手で握ったまま食器に入れる事例しか観察されなかった。Rは該当エピソードが無かった。しかし食器に入れている時間は比較的長かったことから、家庭の観察結果と同様食具の置き場所として食器を利用していると考えて差し支えないと考えられた。

6食器間で出し入れする(f)

【事例 12】[O/15]平皿からお浸しを取り出し一口食べ、汁物が入った深皿に入れる。

【事例⑤】[R/15]湯呑みの縁にかかったお浸しを平皿に戻す。(再掲)

食器間での出し入れは食器が1つしか用いられなかった11ヶ月では観察されなかったが、20ヶ月でも観察されなかった。上の二つの事例は、前者は食物が混ざるもの、後者が食物を戻すもので月齢によって意味合いが異なっていた。

7食べた後の食物を戻す(i)

【事例②】[R/15]さんまを両手で握って食べている。右手でちぎった分を平皿の空いているところに入れる。

【事例⑦】[R/20]貝の窪みに入った汁を飲んだ後、食器に戻す。(同様のエピソード 5 つ)

R に関しては、食物が食器と口を往復するようになっていったと考えられる。O には次のエピソードがあった。

【事例 1】[O/11]左手できゅうり持ち食べながら右手で食器の縁を握っている。保育士が反対側の縁を握って食器を押さえている。右手を開いて空の食器に入れるとすぐにまた縁を握る。きゅうりを持った手を食器に向かって伸ばすと手は食器を外れて縁に接触する。きゅうりを持った手を食器に入れ、手を少し開いて食器にきゅうりを入れるとすぐにまたきゅうりを掴んで口に運ぶ。右手は縁を握ったままである。

この時使用された食器は 1 つだったので食物を食器に(戻す)と分類されなかったが、このカテゴリーに該当すると考えるのが妥当だろう。O は早い時点で食器と口の間を食物が往復するようになったと考えたくなるが、11 ヶ月の時にはテーブルにこぼれた食物を食べることもあった。15 ヶ月時には食器に食物を入れる場合とテーブルに食物を置く場合があった。テーブルの食物を食べる様子が確認されなかったのは 20 ヶ月の時のみであった。

8 その他のカテゴリー 本研究では仕切りのついた食器は使用されず、プレート間で入れ替える(g)に該当するエピソードはなかった。また食べるものを入れ、食べないものを出す(h)に当たるものもなく、むしろ食器の外に出したのもも食べることもあった。本

研究の対象児には観察期間中は好き嫌いが特に見られなかったことも影響しているだろう。自分の食器に食物を入れる(j)については、自分と他人の食器の区別という観点から次のエピソードを挙げることができる。

【事例 15】[O/15]食器を持ってみそ汁を飲む。空の食器をテーブルに置く。みそ汁が入った R の深皿に手を伸ばして触れると保育士が食器を O から遠ざける。

家庭での食事で挙げられた事例(観察 33, 34)では、父の食器と自分の食器を弁別している様子が伺えたが、ここでは他人の食器との区別がないと考えられる。

9 食器に食器が入る 15ヶ月の O の食事では、みそ汁を飲み終わった後テーブルに置こうとして、テーブルに置かれた平皿に深皿が入るというエピソードがあった。R も似たような状況があったが、食器どうしが接触すると深皿を下ろす位置を調整してテーブル面に置いていた。

【事例 14】[O/15]みそ汁を入れた深皿を保育士が O に差し出すと両手で持ってみそ汁を飲む。テーブルに下ろすとそこにあった平皿に深皿が入る。保育士が深皿を持ち上げて平皿を向こうへ押しやると、O は再び深皿を持ってみそ汁を飲む。

【事例④】[R/15]みそ汁の入った深皿を両手で持って飲む。食器をテーブルに置こうとすると平皿にぶつかる。食器を左にずらしてテーブルに置く。

この事例からも O は食器とテーブル面の区別が明確ではない様子が伺える。対する R は他の食器を収める場所として食器を利用していないものと考えられる。

この時の両者の食事で対照的だったのは、平皿の中の状態である。Oの食器は中身が散乱していたが、Rの場合平皿に仕切りがないにも関わらず、お浸しも魚も混ざり合わずに区別されたまま食事をしていった。しかしながら、Rもまた依然としてテーブルにこぼれた食物を食べることがあった。

D まとめ

本研究の分析結果から以下の5点が明らかとなった。

(1)本研究の対象児2名について〈入る〉が20ヶ月時に観察されなかったこと、Oでは3時点で〈入れる〉が、15ヶ月時に〈戻す〉が、20ヶ月時に〈食具を入れる〉が出現したこと、そしてRでは15ヶ月と20ヶ月で〈入れる〉と〈戻す〉が現われたことは、〈入れる〉が月齢とともに消失し、その他の食器に何かを入れる操作が増加した家庭での食事の結果と共通していた。

(2)Oは〈入れる〉が本研究の3時点で観察され、Rは15ヶ月と20ヶ月の2時点で観察された。これは13ヶ月以降長期間〈入れる〉が観察された家庭での食事の結果と類似していた。

(3)家庭での食事で得られた食器利用の10のカテゴリーのうち、本研究では食器に偶然食物が入る(a)、テーブル面と食器内で食物をいじる(b)、食器に食物を入れる(c)、食器から出た食物を戻す(d)、食具を置く(e)、食器間で出し入れする(f)、食べた後の食物を戻す(i)の7つが見られた。

(4)プレート間で入れ替える(g)はプレート使用が一度もなく該当するエピソードもなかった。食べるものを入れ、食べないものを出す(h)も観察されなかった。

(5)自分の食器に食物を入れる(j)は確認されなかったが、自分と他人の食器の区別という点でOの15ヶ月時に関連するエピソードがあった。

4 総合討論

分析1の結果から(1),(2)の通り、食器操作の種類

や出現時期は類似していたが、いずれにしても3時点ではまだ比較が足りないという問題が残った。(3)のカテゴリーについて、先行研究と共通して見られた7つについては1歳代の食事における食器操作の指標としての利用が期待される。

(4)については仕切りがあるプレートが使用されなかったことに起因すると推測されるが、しかしRは15ヶ月時に平皿の中身が混ざり合うことなく食事をしていった。年齢の高いクラスの食事では、特に大きな平皿に複数の料理が盛り付けてある場合に中身を混ぜ合わせずに食べ終える様子が見られる。低月齢では難しい食べ進め方かもしれないが、仕切りがなくても食器内を複数の穴として利用する様子もつと上の学年で観察される可能性がある。

それから、食べるものと食べないものの食器を利用した区別は今回一度も観察されなかったことから、個体差の大きいカテゴリーと考えられる。これは好き嫌いがある子どもにとっては重要な区別だが、何でも食べることができる子どもはそもそもこのような区別が必要ではないと考えられるからである。このカテゴリーは今度子どもの味覚の面から更なる検討を要するものと思われる。

(5)の自分の食器に食物を入れる(j)は、自分と他人の食器の識別と扱うことができる。これはむしろ「他人の食器から食べる」という〈取り出す〉操作から捉えた方が良いもの考えられた。その理由として、保育園の食事は保育士が料理をよそう配膳形式で、子ども自らが自分や他人の食器を区別して食器による機会が殆どなかったことが挙げられる。

本論の最後に以下の事例を紹介する。この月齢での水を飲む食器操作技能の状況を見て取ることができる。それと同時に保育士と子どもの共同行為としての側面も窺える。この種の事例は存在論的視点からではなく食技能の獲得や保育士の介助の観点からの検討が適しているだろう。

【事例7】[O/11]保育士が水を飲ませている。手を

ゆっくり食器に伸ばしていき、やがて食器に手を入れすぐに出す。保育士が湯呑みをテーブルに置くとすぐに上から手で掴む。保育士が O の両手を持って湯呑みの側面を持たせる。保育士が手を添えながら湯呑みを持って水を飲む。

異なる観点から同じ現象を扱うことで、食器操作はより多層的な理解が可能となる。存在論的観点からは、技能の発達や社会文化的アプローチを補う、子どもが食器を食器として利用していく過程を示す食器利用のカテゴリーが提案された。

保育所保育指針の食育の推進の項目では次のように定められている。

(2)乳幼児にふさわしい食生活が展開され、適切な援助が行われるよう、食事の提供を含む食育の計画を作成し保育の計画に位置づけるとともに、その評価及び改善に努めること。

(「保育所保育指針(平成 20 年 3 月改訂)」)

本研究から得られた食器操作のカテゴリーが乳幼児の食事の「援助」や「食育の計画の作成」とその「評価や改善」に役立つことを期待する。

(指導教員:佐々木 正人)

注

1) 本プロジェクトのタイトルは「幼児期の食器操作の発達過程:学校教育における食育促進カリキュラムの基礎として」であるが、研究計画の変更により観察期間が 11 ヶ月齢から 20 ヶ月齢となった。それに伴い生後およそ 1 年半までを乳児期とする区分に従って報告書のタイトルは「乳児期の食器操作の発達過程:学校教育における食育促進カリキュラムの基礎として」とした。

引用文献

- 青木洋子.(2011). 食事における容器操作の縦断的観察. 質的心理学研究,10,25-45 .
- 跡見和子・宮崎照子.(1974). 乳幼児の食事行動について. 東京家政大学研究紀要,14,53-61.
- 朴東燮(2011).社会・文化・状況.茂呂雄二,田島充士,城間祥子(編).社会と文化の心理学—ヴィゴツキーに学ぶ.京都:世界思想社.
- Connolly, K., & Dalgleish, M. (1989). The emergence of a tool-using skill in infancy. *Developmental Psychology*, 25, 894-912.
- ゲゼル,A.(1952). 乳幼児の心理学:出生より 5 歳まで. 山下俊郎(訳), 東京:新教育協会.
- 伊与田治子・足立己幸・高橋悦二郎.(1996).保育所給食の料理形態との関連からみた用事における食具の持ち方および使い方の発達的变化. 小児保健研究,55(3),410-425.
- 加地大介. (2008a). 穴と境界—存在論的探究. 東京:春秋社.
- 加地大介.(2008b).現代のオントロジーとアリストテレス.環境のオントロジー. 河野哲也,染谷昌義,齋藤暢人(編著). 東京:春秋社.
- 河原紀子. (2002). 子どもの道具使用を支える大人の援助. 中央大学教育学論集, 44,149-166.
- 厚生労働省.(2008). 保育所保育指針 . (<http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/hoiku.html>).
- リード, E. S. (2000). アフォーダンスの心理学. (佐々木正人, 監修, 細田直哉, 訳). 東京: 新曜社.(Reed, E. S. (1996). Encountering the world: toward an ecological psychology. New York:Oxford University Press.)
- 田島信元.(2003).共同行為としての学習・発達.東京:金子書房.
- 外山紀子.(2008).食事場面における1-3歳児と母親の相互交渉:文化的な活動としての食事の成

- 立.発達心理学研究,19,232-242.
- 外山紀子・無藤隆.(1990).食事場面における乳児と母親の相互交渉.教育心理学研究,38,395-404.
- Valsiner,J.(1987).Culture and the Development of Children's Action. New York:Wiley & Sons.

謝辞

長期間の観察を快く御承諾頂き御協力下さいました保育所の皆様,保護者の皆様に厚く御礼申し上げます。また学校教育高度化センター研究プロジェクト全体会で多くのコメントを下さいました先生方,ならびに佐々木正人教授の御指導に感謝致します。